

1982●昭和57年

中嶋 嶺雄

十一月某日 郷里松本の芸術文化祭特別企画「鈴木鎮一と才能教育」に引っぱり出されて、江藤俊哉氏らと特急「あずさ」で往復。車窓よりの紅葉に目を奪われる。近刊の拙著のゲラ刷りに手を入れねばならず、グリーン車最前列の折りたたみ式小机のある座席に移ったが、列車の揺れて思うにまかせない。ポケットにしのばせてきた串田孫一「山の独奏曲」(集英社文庫)を拾い読む。先日、新宿中村屋で開かれた外語山岳部創立三十周年記念の夜、著者からいただいた署名入りのものだが、小生には、串田さんの「若き日の山」(河出書房、一九五五年)以来の一方通行の出会いがあるので、ことに中央線の車中でのこの画文集は、一寸まぶしいようでもあり、わが青春を甘ずっぱく回想させて余りあるものだ。

帰路の三時間半は、坂野正高「イメジの万華鏡」(筑摩書房)を楽しく覗くことができた。坂野氏の著作は、どれも骨格があいまいで、メモなのかエッセイなのか、論文なのかルポなのか定まらず、どことなく未完成の感があるけれど、実はそこが魅力で、今回もいつの間にか中国学の国際的なコ

のではないかと思う。一日のうち一回は、村のどこかで公的な宴会があるといつていいぐらいである。人口千二百人の過疎村で、村役場の職員が八十人、公的な宴会には何らかの形で役場が関係しているから、村の三役は一日に三回、同じ顔ぶれて宴会をしつづけるなどということもある。冬になると、通常四メートル、多いときには六メートルの積雪がある村だから、冬になればこの宴会が政治の場としてだけではなく、唯一の娯楽の場としても機能している。

この宴会がすさまじいもので、次から次へとお酌にくる。その酌をまともにうけていると、アツという間につぶれる。ともかく、完全に酔っぱらわなければ終らない、というよりそれでなければ宴会ではないといった感じなのだが、そんなことを昼間からやっているわけにはいかないから、村の人たちも早く酔っぱらった顔をして、コップやお碗を机の下において、お酌された酒をコソソリと注いでいる。宴会の終ったあとの机の下のコップやお碗には、飲みほした以上の酒が捨てられている。この村の宴会を知っている富山県の人々は、利賀村は異常ですよという。村の人たちも、とくに若い人たちは、しんどい、しんどいといながらも、さつさと酔っぱらっている。

網野善彦と阿部護也の対談「中世の再発見」（平凡社）に、ヨーロッパと日本の宴会の比較がでてくる。十一世紀以降、ヨーロッパでは公的には無礼講的な宴会は消えていったそうである。宴会で乱れてはいけならしい。だから酔っぱらわないために、長い宴会の場合は大変な苦しみを味わうという。いずれにしろ公的な宴会というものは、洋の東西、形式の如何を問わず、マゾヒスティックな快感を会得する以外、楽しいものではなさそうである。

海野弘「都市とスペクタクル」(中央公論社)にも宴会の話がでてくる。一七四六年にイギリスのウオーリック伯爵が催した大宴会には、六千人の人が招待され、酒の地がつくられた。賓客は、大うぐいすという巨木を境界をこえると一つのスペクタクルであることがわかれ、といひ、大うぐいすにその通りである。スペクタクルでありつつ登場人物たちにとつてはまさしく受苦の場以外のなにものでもない、といった宴会の場面を、おもしろく舞台上に具体化できないものかと考えたりする。

(すずき・ただし氏Ⅱ演出家・劇団SCOT主宰)

ミニニティのなかに引きこまれてしまった。まさに「知の万華鏡」でもあるのだが、無意識のうちにちりばめられた学識と人柄がおのずと香っている。ハーバード大学の碩学「K・フェアバンク教授」と書誌をつくられたときの苦勞も微笑ましいが、コピーのできない当時は、さぞかし困難な仕事だったろう。帰宅すると、若い中国研究者、喜田昭治郎氏の「現代中国外交研究文献目録」（龍溪書舎）が贈られてきていたが、戦後日本のこの分野の文献を網羅していて、これはまた完璧な書誌だと思った。

「イメジの万華鏡」の快い読後感に誘われて、明朝渡すゲラ刷りの校正を終えたあと、徳永康元「ブダベストの古本屋」（恒文社）を開いてみた。坂野氏と徳永氏と、この二つの著書にはどことなく大きな共通性がある。徳永氏は大先輩の同僚だったが、まさに天下の読書人にして、古本の入った風呂敷包みを小脇に飄飄とワルシヤワやブダベストの町を歩いている姿がそのまま本書からしのばれる。徳永先生に勧められてユーゴのドブロヴニクへ寄り道する私をわざわざブダベストの駅頭まで見送って下さったのは、たしか一九七〇年夏のことだった。

十一月某日 知友の萩原延寿氏が「朝日ジャーナル」に連載している伝記「東郷茂徳——一外交官の形成」が今週で第一部を終って一段落した。

アーネスト・サトウの日記を通じて日英関係の深奥を描いた萩原氏の「遠い崖 I」（朝日新聞社）と読みくらべながら、これらの作品がひきつづき完成されることを念じないわけにはいかなかった。萩原氏の作品に誘われ、小堀桂一郎「宰相鈴木貫太郎」（文藝春秋）を手にとりて再読。伝記の妙味にひたっていたら、たまたま、東郷茂徳の女婿で前駐米大使の東郷文彦氏の回顧録「日米外交三十年」（世界の動き社）が送られてきた。硬骨にしてシャイな上流外交官の矜持とした語り口に、かま

て同時代史の重みを感じる。二〇世紀国際政治史（而立書房）は、一人の地味な学究肌の中国サードの外交官が日露戦争から太平洋戦争までの外交史を綴った遺稿集である。外務省にもこんな人がいるのかと思われた篤学の士であり、私の処女作「現代中国論」（青木書店）を受読してくださっていたとお便りをいただいたこともあっただけに、遺族や知人の手になる本書の刊行に接して大変嬉しかった。

故人といえば、血液型で人気を博した能見正比古氏を偲ぶ「故能見正比古追悼寄稿集」（ABOの会）も今日送られてきた。私も一文を草しているが、三木鶏郎、中村メイコ氏の文章がことのほか味わい深く、能見氏自身の自由詩「仲間よ帰って来なせ」に思わずホロリとする。

今週は、鈴木佑司「東南アジアの危機の構造」（勁草書房）も印象深かった。この論文集の何本かは、「世界」に連載中に読んだものだが、東南アジア政治研究の若い世代の成長ぶりが示されている。渡辺利夫「現代韓国経済分析」（勁草書房）も、同じく若いアジア研究者の成果だが、ともに「地域研究」をベースにしているが、前者が理想主義、後者が現実主義に立っているのが興味深い。

このところ、靴の中に入れていて、少しでも時間があれば読み耽っていた小説、中里恒子「時雨の記」（文藝春秋）を秋深き今宵読了。この大人の恋愛小説の手づくりの美しさと味わいを、私はいささか気恥ずかしくも、しばらく独占したい。

十一月某日 毎月十日を過ぎると、書架にたまってくる月刊・週刊の論壇各誌に目を通し、カードに目ぼしい論文題目を記して一種の分類を試みるという作業をもう二年も続けている。東京新聞、中日新聞、北海道新聞、西日本新聞という四つのブロック紙のための上下二回の「論壇時評」を担当し

ているためである。しばしば時評の対象にされてきた私自身、「論壇時評」のあり方に批判をもっていただけに、できるだけフェアな立場から批判を加えたいと思っているが、なかなかつらい仕事ではある。

それに、最近は雑誌の数が多く、時評の対象にすべきものだけでも、月刊・週刊あわせると二十誌前後もあろうか。こうした雑誌を読むのも読書なのかどうかは疑わしいけれど、では一体「論壇」とは何なのか。「論壇時評」はたしかに存在し、それなりに反響もあるようだが、果たして「論壇」なるものが存在するのかわかを問うてみると、答えは途端に両義的にならざるを得ない。そんなことを自問自答しつつ、筆を執っていたら、A紙学芸部からの電話で、今年も年末恒例の「論壇ベスト5」を選んでほしいとのことである。「論壇」はやはり存在するのだろうか。

私にとっては文化大革命初期以来の論敵、いや好敵手というべきか、菊地昌典氏の「絶望の選択 中ソ和解」（徳間書店）を受贈。先般来、「朝日ジャーナル」やNHKテレビで論争しているので、菊地氏の見解は知りつくしているのだが、気になる本でもあり、一氣に通読した。菊地氏はロマンチストだと思つづく思ったが、私の本も今月末に「中ソ同盟の衝撃」（光文社）と題して出ることになっているので、これも偶然とはいえ、菊地氏とはどこまでも縁が切れないのかと思う。

今日も長い一日だった。就寝前の仕事を離れた読書時間に手にした田淵安一「二面の鏡」（筑摩書房）に憑かれて、明日は早朝から大学の講義だというのに、つい深更に及んでしまった。三十年も日本を離れてフランス的エスプリにもっとも深く接している画家・田淵氏ならては、日本主義は、愛国心やナショナリズムにまつわる生々さを完全に脱して、深い感動を呼ぶ。

（なかじま・みねお氏＝東京外国語大学教授・国際関係論・現代中国学専攻）

'83

昭和58年

田中 小実昌



某月某日 ばくがこれを書いている掘りゴタツのむこうのタタミの上には、十五冊ずつぐらい、いくつも本がつみあげてある。そのいちばんてまえの本の山のいちばん上には、C・G・ユング「ヨブへの答え」（野村美紀子訳、秋山さと子解説、ヨルダン社刊）が置いてある。この本は、広島県呉市の町を見おろす雑木林のなかの教会の牧師の伊藤八郎さんが送ってくれた。伊藤八郎さんは、ばくの妹の夫で、ばくの父が死んだあと、この教会の牧師をしている。どこの派にも属さない独立教会だ。

伊藤八郎さんはC・G・ユングが好きなようで、ユングの「空飛ぶ円盤」（松代洋一訳、朝日出版社刊）もばくにくれた。ユングはフロイトの弟子らしいが、れいの集団無意識ってことを言ってるらしい。

さて、C・G・ユングの「ヨブへの答え」だが、前に読んで、本棚に置いておいたのに、またもやだしてきたようだが、なんのためにそんなことをしたのか、さっぱりおもいだせない。ヨブは旧約聖書のヨブ記のヨブで、ユングの「ヨブへの答え」はおもしろく読んだのに、どんなことが書いてあつ

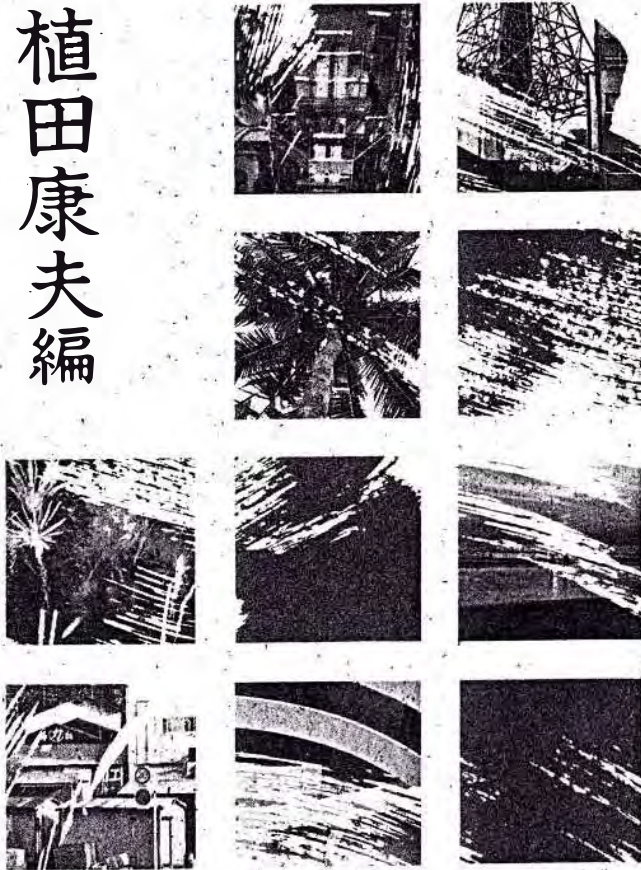
ISBN4-06-204539-7 C0000 P3000E(0)

定価3000円(本体2913円)

読書日録大全

植田康夫編

読書日録大全



ふれられない本がある。
いに染み入る本がある。

作・労作・問題作から、奇書・珍書・稀覯本まで、
代きっての読書人たちが綴った読書三昧の記。

講談社・定価3000円(本体2913円)

『書物の森へ誘う
ミニク読書ガイド』
植田康夫編

講談社
P

●読書という行為は、人間が思考への回路を歩むプロセスを体現しており、その記録である「読書日録」は「知のドキュメント」でもある。また「読書日録」でとりあげられた本は、執筆者の内発的な欲求によって読まれたものであり、それだけに書評とはひと味違った「読書ガイド」として読むことができる。本書を繙かれる人は、自分の好みで、さまざまな読み方をしていただければと思う。

(植田康夫「序にかえて」より)

ISBN4-06-204539-7 C0000 P3000E(0)